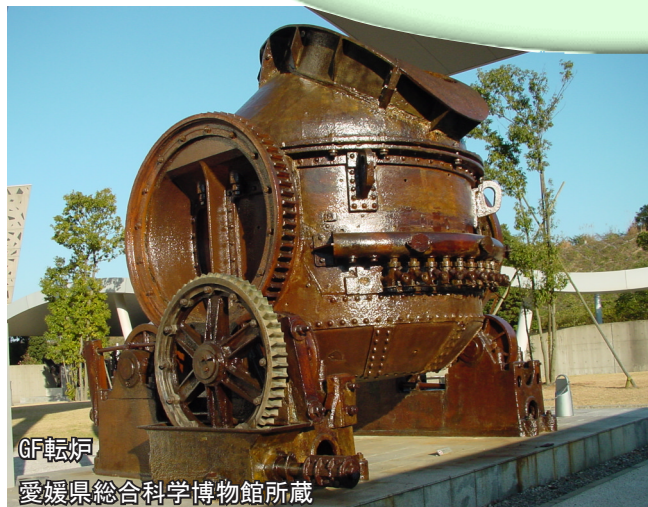


てんろ GF 転炉 でんしゃ カラミ電車



GF転炉

愛媛県総合科学博物館所蔵

てんろ GF転炉

は、大正11年(1922)～昭和35年(1960)まで、四阪島製錬所で使用されていました。GFとは、この転炉が開発されたアメリカ・モンタナ州のミズリー川に臨む工業都市「Great Falls」の名称から由来しています。炉の直径が約3mで1度に10トン余りの銅(銅鉱石を熔鉱炉で溶かしたドロドロの液状のもので、硫化銅と硫化鉄が成分)を処理できました。

転炉は、炉がつぼようになっていて、炉を自由な角度で回転できることから名付けられています。転炉を用いて精錬(銅の純度を上げる)を行います。溶鉱炉からの銅に空気を吹き込み、酸素と反応させることによって、98.5%の粗銅にします。

住友金属鉱山(株)別子事業所より、愛媛総合科学博物館へ寄贈され、平成6年(1994)から屋外展示場で展示されています。



カラミ電車

愛媛県総合科学博物館所蔵

でんしゃ カラミ電車

は、製錬工程で出る銅を取り除いた後のカラミと呼ばれる製錬カスをおわん状の大きな器(以下:つぼ)に入れ、1列車に2～3個のつぼを連結して、海岸の処理場まで索引して捨てました。その特徴となる大きなつぼから、別名「おつぼ電車」とも呼ばれました。



カラミの岸壁

この作業は大正11年(1922)～昭和30年代まで行われ、夜、カラミを捨てる風景はとても幻想的でした。

カラミ電車で40年近く運ばれたカラミによってできたのが「カラミの岸壁」です。



カラミの海岸



カラミを捨てている様子

昭和35年頃撮影 別子銅山記念館所蔵

また、カラミはただ捨てられるだけでなく、レンガとして再利用され、「カラミレンガ」として、道沿いや階段、門、塀など四阪島ではいたるところで利用されました。

どれくらい?

明治から昭和25年頃までの約50年間生産されていたカラミレンガの1つの重さはいくらでしょうか?
答えは、裏にあります。

